

桑原宿の変遷

桑原宿は、東山道支道および善光寺街道として交通の要所、宿役として古くからその役割を目的に設置されてきました。この頃の桑原村は戦略上の防御拠点の役割から、重要視され現在の稲荷山を含んだ地域でありました。

桑原宿は猿ヶ馬場峠をかかえ、伝馬役のほかには街道整備、冬の除雪等宿場に課せられた諸役は百姓への負担としては相当なものであったと考えられます。この時の中原村の協力はどうか資料が無く知ることができません。

本能寺の変のあと北信濃は上杉景勝氏の領有するところとなり、中南信の小笠原貞慶の侵入に備えて、天正十年（1582）頃に新砦として稲荷山城がつくられました。このことは、領地の防衛形態が山城（佐野山城・龍王城・小坂城・赤沢城）から平城（稲荷山城）へと変わり、地域の役割、重要性がおおきく変化するに至りました。

天正十年上杉景勝が稲荷山に新城を築いた時に町割ができ、このとき桑原郷（更埴市史によると、坂ノ下・苧塚・馬場・大田原・猪津・高善寺・慈眼寺・東光寺・小坂・五反田・金井の十一ヶ村）（旧桑原村誌によると、田原・佐野・坂ノ下・金井・雁塚・岡・番場・後安・荏澤・五反田・小坂・本町・天當河原の十三ヶ村）（桑原郷秘録修正によると、坂ノ下・馬場・刈塚・江沢・五反田・後安・小坂・大田原・金井・佐野・元町・岡・天當河原の十三ヶ村）から年寄役の百姓が召し出されて稲荷山城下に集住させて伝馬役を勤めて開発百姓となった。稲荷山の地域は戦国期には桑原郷十一ヶ村（または十三ヶ村）の一部でありました。

稲荷山城の築城、稲荷山宿の町割がなされるとともに伝馬宿も設置されたことが契機となり桑原宿は衰微し、慶長七年（1602）ころ宿の役割は稲荷山へ移され、時代をおって人家も稲荷山村が増加することとなりました。

桑原宿は猿ヶ馬場峠の登り口であり、松代藩の私的な宿場としての役割で間の宿として幕末まで残置しました。

上杉景勝は、慶長三年（1598）正月、豊臣秀吉の命により奥州会津に転封し、稲荷山村は上田藩領の飛領となり、桑原村は松代藩領で幕末を迎えました。

『倉石英雄氏著 稲荷山の歴史より要約を記す』

・天正頃、稲荷山付近は武田の領地だったが、天正十年（1582年）武田家が滅び、六月に織田信長が亡くなると上杉景勝が占領し、四郡の最先端として天當河原へ稲荷山城を築いた。

・城代は須崎三河守。松木本陣の表門が本丸の裏門にあたるといわれる。

・徳川支配の時代に入り、元和元年（1615）廃城となり元和十年ごろ桑原村と分村したが、城下時代以後も街道すじとして、又商業の繁栄によって稲荷山は発展していった。

（解説）伝馬役

宿場の住民が公用の人（役人）の継ぎ送りや物資輸送を無賃で行うかわりに、年貢などの税金の免除や物を売る市開催の特権を与えられた。また、本陣や旅籠、茶屋を営む権利や、民間人の輸送で駄賃を得ることも定められた。

年次	家数	人口			1戸平均 家族数
		男	女	計	
稲荷山 宝永3年(1706)	206	498	406	904	4.4
稲荷山 享保15年(1730)	255	715	638	1353	5.3
桑原 天明8年(1788)	160			712	4.5
桑原 天保10年(1837)	241	486	444	930	3.9
桑原 弘化2年(1845)	242	501	447	948	3.9
桑原 弘化5年(1848)	235	510	457	967	4.1
桑原 嘉永3年(1850)	244	517	463	980	4.0

家数と人口推移(参考文献 更埴市史 第二卷 近世編)

村名	更埴市史	旧桑原村誌	桑原郷秘録(修正)
坂ノ下	○	○	○
刈塚(雁塚)	○	○	○
馬場(番場)	○	○	○
大田原(田原)	○	○	○
猪津	○		
高善寺	○		
慈眼寺	○		
東光寺	○		
小坂	○	○	○
五反田	○	○	○
金井	○	○	○
佐野		○	○
岡(岡村)		○	○
後安		○	○
荏澤(江沢)		○	○
本町(元町)		○	○
天當河原		○	○
村数合計	11	13	13

稲荷山分村前の桑原郷

佐野里・治田庄桑原郷十三ヶ村（稻荷山分村前）



志の山

大田原（田原）

治田山

東山道支道

小坂

本町（元町）

千曲川

佐野山

善光寺道

刈塚（雁塚）

天當河原

佐野

荏澤（江沢）

五反田

金井

岡（岡村）

馬場（番場）

後安

坂ノ下

佐野川

